マリアンネ・ヴェーバーとアメリカ
― セツルメントと社会化への関心

内藤　葉子

はじめに

マリアンネ・ヴェーバー（Marianne Weber 1870-1954）は、夫マックス・ヴェーバー（Max Weber 1864-1920）らリベラルな知識人との知的影響関係およびドイツ女性運動との関わりのなかで、近代化する社会において女性の置かれた状況を観察し、女性の存在意義と可能性を哲学的・社会学的・実践的に探究した人物である[1]。本稿では彼女が1904年8月下旬から11月にかけて夫と共にしたアメリカ旅行に注目し、それが彼女の思想形成に及ぼした影響を考察するために、その体験の内容を明らかにする。

マックス・ヴェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』や「北アメリカにおける『教会』と『ゼクテ』」に関連して有名なこの旅行について、彼女は1926年に出版した伝記でまとまった頁を割いて紹介している[2]。そこではあくまでもマックスに焦点を当てて描かれており、マリアンネ自身がこの旅行から何を得たのかについては抑制的である。しかしこの旅行はドイツ女性運動に関わっていたマリアンネに、アメリカの女性をめぐる諸状況に直接触れ、アメリカのフェミニストたちと接触の機会を与えるものであった。現在マックス・ヴェーバー全集において、ヴェーバー夫妻が母ヘレーネ・ヴェーバーとその家族に宛てた手紙が公開されている[3]。また彼女はドイツへの帰国後、1905年1月20日にハイデルベルク国民社会協会においてアメリカに関する報告講演（「アメリカから

1　以下、彼女の表記はマックス・ヴェーバーと区別して「マリアンネ」とする。文中の〔　　〕は筆者による挿入である。

2　Marianne Weber, *Ein Lebensbild* (Tübingen: J.C.B.Mohr [Paul Siebeck], 1926), 292ff [= 大久保和郎訳『マックス・ウェーバー』（みすず書房、1963年）、222頁以下]. 以下 *Lebensbild* と表記。

3　G.Hübinger und M. R. Lepsius, hrsg., *Max Weber Gesamtausgabe Ⅱ/4: Briefe 1903-1905*, (Tübingen: J.C.B.Mohr [Paul Siebeck], 2015). 以下 *MWG Ⅱ/4* と表記。

女性たちは何を得るのか:旅行の印象」）を行っている[4]。本稿はこの書簡集と講演論文を中心に、マリアンネの視点から彼女のアメリカ旅行を捉えなおすことを試みる[5]。

1980年代以降ドイツ女性史研究の文脈において、マリアンネは中産層市民女性運動の中核となったドイツ女性団体連合（Bund Deutscher Frauenverein: ＢＤＦ（ベーデーエフ）, 1894-1933）の幹部の一人として、教養文化人の観念的な男女平等を要請し、教養市民層と労働者階級の女性間の差異を強調した人物として論じられてきた[6]。しかし本稿で論じるように、彼女はこの旅行を通じて中産層女性と労働者女性がセツルメントを通じて協働する様子に強い関心をよせている。彼女は女性運動の階級的分断を当然視したわけではなかったことがうかがえるのである。本稿の試みによって、マリアンネのフェミニズム思想が倫理的主体としての女性に関する哲学的・倫理的考察と、ドイツ家族法の理論的・法制史的研究を通じてのみならず、女性運動を通じて実践的・経験的に形成されたものでもあることを明らかにする。

Ⅰ ヴェーバー夫妻のアメリカ旅行

ヴェーバー夫妻のアメリカ旅行はどういう経緯と目的で敢行されたのだろうか。

第一に、直接的なきっかけは、ハーヴァード大学のミュンスターベルク (Hugo Münsterberg) からセントルイスでの科学技術大会への招待があったことである。この大会はセントルイス万国博覧会開催と合わせたもので、1904年9月19日の週に開催された[7]。

---

4 Marianne Weber, “Was Amerika den Frauen bietet: Reiseeindrücke,” in *Centralblatt*, Jg., 6, Nr. 22 (1905), 170-73; Nr. 23 (1905), 177-79; Nr. 24 (1905), 186-88. 以下 “Amerika” と表記。

5 この旅行についてマリアンネに焦点をあてた研究、また彼女にも相当の言及がある研究としては以下を参照。B. Meurer, *Marianne Weber: Leben und Werk* (Tübingen: Mohr Siebeck, 2010), 以下 *Leben u.Werk* と表記 ; G. Roth, *Max Webers deutsch-englische Familiengeschichte 1800-1950* (Tübingen: J.C.B.Mohr [Paul Siebeck], 2001), 以下 *Familiengeschichte* と表記 ; G. Roth, Europäisierung, Amerkanisierung und Yankeetum: Zum New Yorker Besuch von Max und Marianne Weber 1904, in *Asketischer Protestantismus und der ›Geist‹ der modernen Kapitalismus*, hrsg., W. Schluchter und F. W. Graf (Tübingen: Mohr Siebeck, 2005), 以下 “Europäisierung” と表記 ; L. A. Scaff, *Max Weber in America* (Princeton, NJ: Princeton University Press, 2011).

6 Cf., B. Greven-Aschoff, *Die bürgerliche Frauenbewegung in Deutschland 1894-1933* (Göttingen: Vandenhoeck& Ruprecht, 1981); I. Gilcher-Holtey, “Modelle ‘moderner’ Weiblichkeit: Diskussionen im akademischen Milieu Heidelberg um 1900,” in B. Meurer, hrsg., *Marianne Weber: Beiträge zu Werk und Person* (Tübingen: Mohr Siebeck, 2004). 以下 *Beiträge* と表記。

7 Scaff, 54.

第二に、母ヘレーネの父G・F・ファレンシュタインの子孫、ヘレーネの異母兄弟にあたる親戚の訪問を目的とした。ノックスヴィル、マウント・エアリー等への訪問はこのためであった。

第三に、ヴェーバー家、とくに父ヴェーバー（Max Weber sen. 1838-1897）の古い交友関係にあったカップ（Friedrich Kapp 1824-1884）の二人の娘、および鉄道王ヴィラード（Henry Villard 1835-1900）の家族への訪問を目的とした[8]。すでに1888年に父ヴェーバーはヴィラードの北アメリカ鉄道開通祝いの鉄道旅行に参加して渡米していた。こうした環境のもと1893年に息子マックスはシカゴの世界コロンビア博覧会を訪れる計画を立てていたが、この計画はマリアンネとの婚約により立ち消えた。ロートがとくに強調することだが、早いうちからマックスのアメリカへの関心は下地形成されており、それは何よりも「ドイツとアメリカの世界経済的統合」への関心であった[9]。

ただしロートは、マリアンネが第三の点についてはほとんど関心を示していないとみており、マックスの伝記を書いた彼女がヴェーバー家の交友関係に関わるこの「言及されるべき価値のある」内容を無視したことを批判的に指摘している[10]。たしかにマックスの軌跡を辿る場合、彼女の記述の不正確さや不十分さは否めない。しかしマリアンネ自身に焦点をあてるならば、彼女は自らの関心にしたがってアメリカを旅行している。実際、マックスとの関心の違いから、両者は旅行中別行動することも多々あった。

旅行前後の時期のマリアンネの動向をおさえておくと、1893年にマックスと結婚したあと、1894年にフライブルク、その後1897年にはハイデルベルクへと移り、そこでハイデルベルク女子教育女子高等教育協会の会長を引き受けた。この協会が1900年にBDFに加盟し、彼女は幹部の一人として活動することになる。また1907年に出版される主著『法発展における妻と母』の準備・執筆時期に重なってもいた。マックスの病気が深刻化した時期でもあり、世紀転換期頃は療養のためにイタリア各都市等を旅行する生活を送っている。

マックスの病気に回復の兆しが見られた頃、夫妻は1904年8月20日にドイツのブレーマーハーフェンから汽船に乗り、30日にニューヨークに到着した。帰路は11月19日にニューヨークを出発し月末にハイデルベルクへ戻っている。この

8 この関係については以下を参照。Roth, *Familiengeschichte* 475ff; Roth, “Europäisierung” カップは十一歳のマックスにベンジャミン・フランクリンの自伝を贈った人物である。カップの娘クララとハンナは銀行家のリヒテンシュタイン兄弟と結婚した。カップ一揆を起こすヴィルヘルムは息子である。

9 Roth, “Europäisierung,” 11.

10 Roth, “Europäisierung,” 18, 19, Anm.26.

旅行について彼女が義母ヘレーネに報告した内容は、大都市の様子、教育制度、万国博覧会、芸術[11]、建築[12]、都市と地方の生活、住宅事情、家事労働、労働者問題、黒人問題、移民の生活（とくにドイツ人、ユダヤ系ドイツ人、ユダヤ系ロシア人）など多岐にわたっている。以下においては、彼女の手紙と講演論文をもとに、彼女の女性問題への関心が際立って現れているテーマを中心に紹介していこう。

Ⅱ マリアンネはアメリカで何を見たのか

1．ノーストナワンダ―ドイツ系移民家族の生活と主婦の家事労働

ⅰ．ドイツ系移民家族の生活

9月6日ヴェーバー夫妻は、ナイアガラの滝に近い製材業の産業都市ノーストナワンダにハウプト家を訪問した。ドイツの都市ハレの神学者の息子ハンス・ハウプトは、国民経済学者でありハレの枢密顧問官でもあるヨハネス・コンラートの娘マルガレーテと結婚し、1894年にアイオワ州ニューウェルに移住、その後ノーストナワンダに移ってドイツ改革派教会の牧師の仕事をしていた。マルガレーテは四人の子どもを育て、収入の多くない牧師の家庭で家事の大半を担っていた。マリアンネは後年伝記のなかで、「国家の援助なしに、労働者地区の自発的な寄付によって集まってくる収入で文化生活を維持する、精神労働者たちの無欲で負担の大きい生活を初めてみた」と述べている[13]。1904年の手紙ではマルガレーテについて次のように書いている。

> この方は本当に素晴らしく聡明で有能な方なのですが、ただ優美さとエレガンスが欠けているのです（彼女の厳しい生き方においてこうしたものをどこから調達すればよかったというのでしょうか！？）。たしかにそうなのですが、これが欠けていることによって、まったく女性の美的文化に非常に重きを置くアングロ・アメリカン社会は―いずれにせよドイツ人を見下すので

---

11 マリアンネはダルムシュタット派のヨーゼフ・マリア・オルブリッヒ、ペーター・ベーレンスらの作品を賛美している。彼女の美的判断力をスカッフは高く評価しており、フランク・ロイド・ライトも同じ展示をみて同様に熱中したことを紹介している。Marianne, Brief an Helene Weber und Familie vom 27. September 1904, in *MWG Ⅱ/4*, 308; Scaff, 66-69.

12 例えばフレデリック・ロー・オルムステッドとカルヴァート・ヴォークスによるバッファローの景観デザイン、ヘンリー・リチャードソンによるボストンのトリニティ教会建築への言及。Mrianne, Brief an Helene Weber vom 8., 9., bzw.11. September 1904, in *MWG Ⅱ/4*, 280; Marianne, Brief an Helene Weber und Familie vom 11. November 1904, in *MWG Ⅱ/4*, 383; Scaff, 37, 68, 162.

13 Marianne, *Lebensbild* 297(=226頁).

すが、それ以上に―彼女にはなおも固く閉ざされるのでしょう[14]。

さらに彼女は当時のアメリカ社会におけるドイツ人移民たちの地位の低さを指摘する。

「ドイツ人」はここではまったく低級のカーストを代表しております。〔……〕それゆえ移民のドイツ人たちにとって、子どもたちを言語と習俗において完全なアメリカ人にするということが唯一正しいことなのです。さもないと子どもたちはずっと疎外され、排除されていると感じ続けなくてはなりません。〔……〕わたしはここではドイツ人として絶対に生きたくないと言わねばなりません。というのも教養ある人々にとっては実際のところ、交際関係を見出すことが本当に難しいことだからです[15]。

マックスもまた、ドイツ語のアクセントを残していることがマルガレーテの社交性に陰りをおとしていること、また牧師の給料では、大学教授の娘としては大変苦労するであろうと指摘した[16]。

ⅱ．家事労働について

マリアンネはマルガレーテをモデルの一人としてアメリカの主婦労働を観察している。マルガレーテは、十代の女中一人を使いながら四人の子どもと自分の衣服を縫い上げるほどの家事を切り盛りし、夫の教会でオルガンを弾き、教区の女性協会の面倒をみていた。それは「ハレの枢密顧問官の娘」という教養市民層出身の女性にとっては厳しい生活であった[17]。

マリアンネはドイツの中産層家庭との違いとして、「すべての既婚女性の五分の四」は「使用人の手助けなしに」家事労働を一人で遂行するという事実を挙げ

14 Mrianne, Brief vom 8., 9., bzw.11. Sep., 280.

15 Ibid.

16 Max Weber, Brief vom 8., 9., bzw.11. Sep., 277.

17 一九世紀を通じてドイツでは観念論哲学や新人文主義の影響のもと、専門的・実用的能力とは異なる、人格や感性の陶冶を重視する「教養」への傾斜が強まった。そこにプロイセンを中心とした大学制度・ギムナジウム制度・国家資格試験制度の整備が結びつくことによって「教養市民層」が形成された。それは大学教授・ギムナジウム講師・（プロテスタント系）聖職者・高級官僚・裁判官・弁護士・医師など、ドイツの政治・社会・文化諸領域において圧倒的に優位にたつ少数のエリート層から構成された。しかしドイツ社会は教養市民層と非教養市民層へと分化し、また一九世紀末以降労働者階級やカトリック勢力が対抗的に台頭することで、教養市民層の社会的優位は後退した。Cf., 野田宣雄『ドイツ教養市民層の歴史』（講談社学術文庫、1997 年）。

ている。教師の平均年収800 − 1200マルクでは使用人を十分に雇うことは難しいし、使用人たちもまた日曜日や平日夜八時以降は職務遂行を拒み、労働組合にも参加している。それゆえ、「教養層のアメリカ人女性の主婦の仕事」は総量が増し、また「驚くほどの価値と重要性」をもつことになる。ドイツでは家事は目的に対する手段とみなされるが、アメリカではドイツよりもいっそう多く「自己目的」となっている[18]。マリアンネはニューヨークの宿泊施設（boarding house）に泊まっていたとき、子どもをもたず、節約と快適さのためにその宿泊施設に住み続けるアメリカ人夫婦をみて、「もしわたしがここアメリカで、わたしたちのドイツのお財布事情で、また「ベルタ」〔ヴェーバー家の女中〕なしで生活しなくてはならないとしたら、わたしは毎日を掃除と料理にばかり費やすことより宿泊施設で暮らすことを百倍も好んだことでしょう」と述べている[19]。

こうした主婦の過重な家事労働を支援するものとして、アメリカの家庭生活にはドイツよりもいっそう技術の浸透がみられるという。工場で裁断された木材で作られる住宅は「セントラルヒーティング、都市ガス、キッチン・お風呂・寝室での冷温の水道管を備えて」おり、「キッチンと食堂は常に隣り合わせ」になっている。しかし彼女はすぐに夫による家事支援にも言及する。少量の洗濯物も妻に任せっきりのドイツ人夫がいるらしいですが、と講演の場での合いの手をはさみながら、マリアンネは、アメリカ人男性は暖房装置の手配・長靴の手入れ・自分の部屋の掃除を行い、妻と一緒に食器を洗い、子どもたちもオムツが外れるや埃掃除・掃き掃除・ベッドメイクなどに協力させられ、それを通じて自力でやり遂げ自発的に働くことを早くから学ぶのだと報告した[20]。

こうした論調からマリアンネは、夫が家事に積極的に参加する姿勢、つまり家族のなかでの男女関係の在り方の変化、伝統的価値の深いところでの「価値変換」こそが重要であり、技術はそれに応えるものではないとみていたことがうかがえる。彼女は、女性の家事労働負担を技術によって軽減することは女性解放にとっては本質的な解決にはならないと考えていたのである[21]。

2．バッファロー、シカゴ―ジェイン・アダムスとハルハウス

i．セツルメント訪問

18 Marianne, “Amerika,” 177-178.
19 Marianne, Brief vom 11. Nov., 381.
20 Marianne, “Amerika,” 178.
21 T. Wobbe, “Marianne Weber (1870-1954): Ein anderes Labor des Moderne,” in *Frauen in der Soziologie*, hrsg., C. Honegger und T. Wobbe (München: C.H.Beck, 1998), 175.

9月8日、マリアンネはマルガレーテとその父コンラートとともに、ノーストナワンダから遠出してバッファローにまで足を延ばした。ドイツ系移民のためのセツルメントを訪れるためである。マリアンネはこの旅行中とくにセツルメント運動に関心をもった。それは1880年代にイギリスに始まり、北米そしてプロテスタント系のドイツにも広がったもので、教育を受けた中産層出身者が貧困者地区や労働者地区に定住し、自助の支援を行う形で共同生活を営むものであった。とくにアメリカでは高等教育を受けた女性たちがまだキャリアを生かせる場がなかった時代、その多くを引き寄せた運動であった[22]。当時のバッファローは人口四〇万人のドイツ系移民を多く抱えた都市であり、マリアンネたちが訪れたのはネイバーフッド・ハウスとウェストミンスター・ハウスであったと推定されている[23]。

9月9日、ヴェーバー夫妻は当時人口一八〇万人のアメリカ第二の都市シカゴに移動した。彼女はここでハルハウス（Hull House）を訪問し、「アメリカで知り合ったなかでももっとも魅力のある、強い感銘を与える人物[24]」J・アダムス（Jane Addams 1860-1935）に会った。マリアンネは荒廃した赤煉瓦の建物や小さな飲食店の並ぶ、ひどい敷石の敷かれた汚れた通りを通ってハルハウスに到着したときの様子を次のように描写している。

> 外見的には目立たない建物があり、そこに三〇人の常任の男女の支援者たちが住み、彼らは約七五人の外部からの支援者によって支えられています。もし汚れた不調和の世界から、本や絵画や快適な椅子の備えられた快適で芸術的な趣味をもった部屋に踏み入れたら、気が楽になってほっと息をつくことでしょう。ここには相通じ合った労働者男女によって「クラブ」として組織された自治集団が毎晩集まってくるのです[25]。

ハルハウスには保育所、幼稚園、女性労働者用の住居、スポーツ場、舞台付コンサートホール、調理設備付き教室、手仕事用の部屋が備えられていた。コンサート、文学や芸術に関する講演、ラテン語やギリシア語までも含むすべての言語の授業、音楽や製図の授業、ダンスや体操の授業、職業教育に必要な身体的・技術的・実践的継続教育講座、作業場となる地下室では指物細工・木工旋盤加工・印刷工・

---

22 *MWG II/4*, 274, Anm. 3; 山内惠『不自然な母親と呼ばれたフェミニスト　シャーロット・パーキンズ・ギルマンと新しい母性』（東信堂、2008年）、76頁。

23 Scaff, 37; *MWG II/4*, 274, Anm.3.

24 Marianne, “Amerika,” 178.

25 Marianne, “Amerika,” 179.

金属工に必要な技術や知識を習得でき、裁縫や料理講座も提供されていた[26]。

何よりもアダムスが周囲の人々から大きな敬意を得ていたことが伝えられる。

> ミス・アダムスは〔……〕きわめて魅力的で、柔和で、気高い人物です。彼女は異名「天使」ヨハンナ〔ジェイン〕にふさわしいと人々は同じように信じています。豊かな人々から資金を調達し、多くの諸力を仕事へと協力させるという彼女の能力は、貧困者と労働者を中心におき、その人たちの信用を得るという彼女の能力に劣らず、私に深い感銘を与えるものです[27]。

アダムスの能力は人道的・博愛的実践としての社会福祉活動と、資金調達および人々の組織化にとどまらない。『民主主義と社会倫理』を著したように、「組織化能力と学問的能力」を結び付けるその力量にもマリアンネは称賛を惜しまなかった[28]。

ⅱ．女性労働組合連盟

このアダムスとの出会いに関連して、マリアンネは9月11日に女性労働組合連盟（Women's Trade Union League: WTUL）の会合に参加している。彼女は、この連盟が家内労働者の組織化と労働組合員の女性だけを雇うよう企業家に強制することに成功しているので、ドイツよりも大きな成果を収めていると評している。この日の議論はシカゴの家畜飼育場労働者のストライキについての議論だった。「その事柄に関する思考のプロセスと観点」がドイツの仲間たちの議論とよく似ており、マリアンネは故郷において既知の課題に触れているようだと感じている。彼女はこの会合で何か一言述べることをアダムスに強いられ、英語で「ミス・アダムスへの賛歌」を話したと書き記している[29]。

3．セントルイス―共学教育への関心

9月17日にヴェーバー夫妻はこの旅行の第一の目的地セントルイスに到着した。マリアンネは9月21日のマックスの科学技術大会での報告を聴講し、また万国博覧会を見学している。マックスは9月26日以降オクラホマ州ガスリーやインディアン保護地区マスコギーへ向かったが、マリアンネは10月1日までここに滞在している。彼女はセントルイスの女性クラブが外国人ゲストに提供した

26 Ibid.
27 Marianne, Brief vom 8, 9, bzw.11. Sep., 283.
28 Marianne, “Amerika,” 178.
29 Marianne, Brief vom 8, 9, bzw.11. Sep., 283.

晩餐会で[30]、ブリンマー・カレッジの学長トーマス（Martha Carey Thomas 1857-1935）と再会し、フィラデルフィアでのブリンマー訪問を約束した。彼女たちは1904年6月17日にベルリン国際女性大会の同じセッションで報告をしていた[31]。

9月29日にマリアンネは男女共学の高校を訪問した。校長は熱心な男女共学の支持者であったという。彼女は、この校長が権威的に振る舞わず、アメリカ的教育原理に基づいて子どもたちを個人的人格として取り扱い、また女性教師陣も少年たちを見事に教育していると報告している。決定的なことは「性」はなく「個人性」だとマリアンネはいう。ドイツとは違って、アメリカの共学教育では少年たちがレディーに対するジェントルマンの振舞いを学ぶという。「こだわりのない仲間意識と、ヨーロッパ社会において男女を否定しがたく分けている大きな精神的隔たりの架橋は、明らかに共通の授業を通じてのみ達成されなくてなりません！」と、「共学授業の道徳的成果」が強調される[32]。彼女は「共学の合理性とその可能な社会的効果」に関心をよせており、このテーマはハイデルベルクの女子教育女子高等教育協会において論じられたテーマの一つであった[33]。

4．フィラデルフィア、ボストン―女子大への関心

i．ブリンマー・カレッジ訪問

ヴェーバー夫妻は10月24日から28日にはフィラデルフィアへ向かった。マリアンネはトーマスが学長を務めるブリンマー・カレッジを10月26日に訪問している。ブリンマーは1885年に開校され、1927年以来東部の名門女子単科大学セブン・シスターズに属するカレッジであり（ウェルズリー・カレッジも同様）、こうしたカレッジは女性を専門職に近づけるための高等教育の場として機能した[34]。

古い木々と緑の芝生の上に建てられた美しい建物、スポーツ場、体育館、プール、教会、図書館など充実した施設、さらには講師との近しい個人的関係、親元から離れた寮生活など「最高に魅力的な社交の形式」がここにはある。マリアンネは哲学と国民経済学の講義に出席し、ドイツとアメリカの教育方法の違いを観察した。カレッジでは「学問的一般教養」「人格性の完成」に重点を置いた教育がな

---

30 スカッフの指摘によると、晩餐会はセントルイスの「水曜日クラブ」によって催された。Scaff, 254. このクラブは文化・教育・市民的改善の進展のために協力する女性たちによって1890年に設立された。Accessed Dec. 14, 2016, http://www.wednesdayclubstlouis.org/about.htm.

31 *MWG II/4*, 307, Anm.16.

32 Marianne, “Amerika,” 171.

33 Scaff, 71.

34 山内、45頁。セブン・シスターズのうち、ヴァッサーは1969年に共学化し、ラドクリフは1999年にハーヴァード大学と統合した。

される。そこは「偉大なものや善なるものについて考える」「理想主義の避難場所」であり、「轟音がとどろき煤煙のくすぶるアメリカ的世界のなかの美と静寂の一つのオアシス」と表現された。しかしカレッジの教育は「ドイツのギムナジウムと大学の中間物」であって、「医師や法律家や神学者をめざす者」は、もう数年「専門的学校（たいてい大学）」に通わなくてはならないと報告している[35]。

ⅱ．ウェルズリー・カレッジ訪問

ヴェーバー夫妻は10月28日から11月4日にボストンに滞在した。このアメリカ旅行の立役者であるミュンスターベルクの自宅で「魅力的なアメリカ人女性」パッファー（Ethel Dench Puffer）と再会している。彼女はフライブルク大学でミュンスターベルクとリッカート（Heinrich Rickert）のもとで勉強していた。今ではウェルズリー・カレッジで美学の講師をしており、マリアンネは「彼女の非常に美しい美学に関する講義」を聞いたという[36]。

ウェルズリー・カレッジについて報告するところで、彼女は女子単科大学の在り方について若干の疑念を呈している。

> ウェルズリー・カレッジはブリンマーよりももっと大きくて、そこでたくさんの女の子たちがほとんど女性の教師陣のもとだけで勉強しています。少しばかりの欠点（draw-back）ではありますが。〔……〕特殊に女性的な雰囲気のなかで相対的に世間から隔離されていることは、私には懸念がないわけではないと思われます[37]。

マリアンネは、女子大が男性の講師たちを完全に後方に置くことや、どの女子大にも男子学生がいないことは「知的には憂慮すべきこと」だという。男女共学の大学の数と通学者数は年々増加している。住居空間や食堂、クラブ、学生組合では性別による分離が為されているが、勉学においては男女の差異は無視されるし、そのことが「深刻な困難さをもたらしているようには思われない」という[38]。彼女は特殊に女性的な閉鎖的空間をつくることを、その理想主義な理念を評価しつつも、職業や研究活動など女性の社会化の観点から肯定的には捉えなかった。

---

35 Marianne, “Amerika,” 171; Marianne, Brief an Helene Weber und Familie vom 27. Oktober, 1904, in *MWG II/4*, 357.

36 Marianne, Brief vom 11. Nov., 382.

37 Ibid.

38 Marianne, “Amerika,” 172.

5．ニューヨーク――フローレンス・ケリーとリリアン・ワルド

i．ヘンリー・ストリート・セツルメント

11月5日から19日にヴェーバー夫妻は再びニューヨークに戻り、コロンビア大学のE・R・A・セリグマン教授夫妻に会っている。夫妻は社会改革と社会福祉関連の施設や組織と関係しており[39]、ヴェーバー夫妻はその仲介からニューヨークのヘンリー・ストリート・セツルメント（Henry Street Settlement）に足を運んだ。そこでマリアンネはF・ケリー（Florence Kelley 1859-1932）とL・ワルド（Lillian D. Wald 1867-1940）に会った。彼女たちはこのセツルメントの共同設立者であった。

> 非常に興味深かったことは、昨日ミセス・フローレンス・ケリーと一緒だったことです。ニューヨーク州の以前の工場監督官であり、現在はある組織の会長です。それは客が商品を買うとき、健全で妥当な労働条件のもとで生産された商品のみを買うことを宣伝する組織です。彼女は非常に優秀で、力強く精力的で「実際的な（ザッハリヒ）」印象を与えます。〔……〕四人の子どもをもち〔実際は三人〕、工場監督官であり、そのほかにも講演などをするなんて、まったくすごいことです！[40]

ケリーは1892年から99年までシカゴのハルハウスに滞在している。シカゴではイリノイ州初の女性工場監督官となり、紡績部門の「労働搾取工場」の労働条件に対して児童労働の撤廃、八時間労働導入のために戦った。さらに1899年には全国消費者連盟（National Consumers League）を設立した。この組織は工場製品が児童労働や劣悪な労働環境からの産物だとわかると、その事実を公表し製造禁止を議会に訴える活動をしていた[41]。

ヴェーバー夫妻は「慈善学校（New York School of Philanthropy）」に行き、そこでケリーの講演を聞いた。マリアンネはこの学校に、ザーロモン（Allice Salomon）が1893年にベルリンに設立した「社会支援活動のための少女と女性のグループ」を想起している[42]。

> わたしはそこでミセス・フローレンス・ケリーが〔……〕貧困のいくつか

---

39 Scaff, 168.

40 Marianne, Brief vom 11. Nov., 388.

41 栗原涼子『アメリカの第一波フェミニズム運動史』（ドメス出版、2009年）; *MWG II/4*, 388, Anm.71, 389, Anm.77.

42 Marianne, Brief an Helene Weber und Familie vom 19. November, 1904, in *MWG II/4*, 400.

の産業的な原因に関して話をするのを聞きました。当地の状況に関する彼女の描写はかなり陰鬱なもので、統一的な労働者保護法の欠如は相当なまでに不快なものです。たとえばある州で児童保護法が幸運にも成立すると、それによって関連する産業は簡単に州の境界を越えて五マイル先の別の州に移動し、そこで子どもたちを気兼ねなく搾取するのです[43]。

マックス・ヴェーバーは、州立分立主義制度のもとでは社会的立法の望みはまったくなく、ストライキを起こしては調停のために工場主に支払いをさせるといった指導的労働者の腐敗を挙げて、「情熱的な社会主義者フローレンス・ケリー」の宣伝活動にもかかわらず、シカゴでは特定の産業の危険性に対して女性保護の法律を作ることに成功しなかったと伝えている[44]。モイラーの指摘によれば、セツルメント運動に現れる「私的な慈善活動」は、児童までをも含む労働者たちの劣悪な環境と労働者保護法の欠如とが鋭い対をなしていたのである[45]。

また、ワルドは都市の貧困地区・労働者地区における看護師セツルメントの組織者であり、マリアンネは彼女のことを「最高に魅力的な人格」と呼び、富裕層からの寄付を募って組織を運営・拡大するその経営手腕に感嘆している。さらに看護師という職業が「自由で世俗的な職業」であり、「権威的に指導され宗教的に色づけされた連合」ではないことに注目している。彼女はそのことが「教養と財産のある集団」出身の女性たちが職業として参入してくる土台となっているとみていた。またこうしたセツルメントは「隣人関係の社会的生活のための中心」として機能しており、そこで少年クラブや少女クラブが会合を開いたり、料理学校などが催されたりする場となっていたという[46]。

ⅱ．女性労働者クラブ

マリアンネは11月17日以前に女性労働者クラブの一つを訪問した。1884年に慈善家ドッジ（Grace Hoadley Dodge）の支援のもとで、ニューヨークの女性工場労働者と売り子たちが「女性労働者協会（Working Girl's Society）」を設立した。こうしたクラブは数と職種において増加し、1900年には二一のクラブが存在

43 Ibid.

44 Max Weber, Brief an Helene Weber und Familie vom 16. November, 1904, in *MWG Ⅱ/4*, 389.

45 Meurer, *Leben u.Werk* 189. ドイツでは1853年の一般営業条例改定において一二歳以下の児童の工場労働が禁止され、一二歳から一四歳の児童労働は六時間以下に制限された。1903年には一二歳以下の児童の家内労働が禁止された。姫岡とし子『ジェンダー化する社会』（岩波書店、2004年）、101頁、および16頁注3。

46 Marianne, Brief vom 19. Nov., 400; Marianne, “Amerika,” 186-87.

した[47]。マリアンネは、さまざまな職種を横断して女性労働者たちが仲間として集まるこの場に、ドイツとは違う平等性があると見た。

> わが国ではさまざまな職業部門の従業員たちの組織化は不可能です――身分の違いの多様性がここには存在しておらず、植字工・店員・掃除婦・工場勤務の少女たちは、仕事のあと「おめかしして」羽のついた帽子をつけ、自分たちは同等だと感じるのです[48]。

マリアンネが会合に参加した日、「能力について」という「哲学的で抽象的な」テーマが議論された。彼女は指導的立場の会長が（「この方は労働者ではなく『レディー（Dame（ダーメ））』です」とマリアンネは記している）、個人的な問題を宗教と道徳の問題にまで広げて、少女たちがいきいきと意見を表明するようにもっていく手腕に感銘を受けている。マリアンネはここでも、自らの力と時間を捧げて「真に民主的で社会的な責任感」を発揮する教養ある中産層出身の人々の姿を捉えている[49]。スカッフが指摘するように、こうしたセツルメントやクラブに彼女は「社会的交流・集団への所属・教育の機会を通して、階級と身分の相違を等しくする授業（レッスン）」のみならず、「私的な関心を公的人格と公的領域に巧みに結びつける授業」を見出していた[50]。マリアンネがドイツ女性運動に積極的に関わりその意義を見出そうとしていたのは、まさに個人的関心を公的な事柄へと結びつけるところにあった。彼女はその具体的姿を、アメリカのセツルメントにおける女性労働者や少女労働者たちのサークルのなかに見出したのである。

またマリアンネはファッションが平等化に果たす機能にも言及している。イタリアやドイツやポーランドからの貧しい移民女性たちがアメリカで生活をはじめるとき、彼女たちは「帽子を被っていない」ことに気づく。それなりの階級のアメリカ人女性が帽子を被らずに通りにくることはないからだ。しかし移民女性が就いたであろう工場労働者や店舗従業員が休日にこうした衣服を身に着けるならば――例えば劇場の入場券を「レディー」と並んで購入しても――、彼女たちは自分たちを「同等者」として感じることができる。

> 飾りのついた帽子と美しいブラウス、優美さと礼儀作法は、アメリカでは、労働者階級の女性や依存階級の女性たちにとって〔どんな錠前でも開けられ

47 *MWG II/4*, 399, Anm.3.
48 Marianne, Brief vom 19. Nov., 399.
49 Ibid.
50 Scaff, 172.

る〕親鍵なのです[51]。

階級や身分の差が歴然としているヨーロッパとちがい、アメリカでは服装を整え礼儀作法を習得すれば誰でも対等な者としてアメリカ社会へと参入できる。それは購入可能で、またある程度は後天的に学習できる要素であっただろう。

iii．少年クラブ

マリアンネはセツルメントで開かれていたユダヤ人の少年クラブにも顔を出した。彼女はそこでドイツの教育原則によっては「不可能な催し」を見学し、その驚きを伝えている。

> 小さな一二歳の少年たちが完全に議会形式で振舞い、新しい仲間の性格に関する「委員会」報告のあと、その受入れについて採決するのです。〔……〕——それから〔……〕政治的な問題についての議論が為されました。「人民」によって選ばれた上院議員と、今までのように代議員によって選ばれた上院議員のどちらがよりよいかということについての議論です。二人の少年が別の意見を代表しなくてはなりませんし、一人の男の子は身振り手振りとあらゆる道具を使って話をし、年配者のように現在の体制の欠点を「批判する」のです。そのさいこの若い政治家たちは（純粋に小さなユダヤ人のプロレタリアの子どもたちです）は、わたしたち大人の前で恥ずかしがるような跡をみせなかったのです[52]。

合衆国憲法修正第一七条は1913年に批准され、1914年の選挙から適用された。それにより上院議員を州議会によって選ぶのではなく、州民による直接選挙で選ぶことになった。マリアンネが見たのは、その政治的課題についての少年たちによる討論の場面であった。組織の民主的構造と自己管理的運営そして議会的形式の早期の習得——セツルメントはアメリカ的な公的価値と様式を学ぶ場であった。毎年八〇万人もの「極貧の文化的に底辺の階層からの移民」——アイルランド、イタリア、ギリシア、アルメニア、ポーランドからの移民、ガリツィアとロシアのユダヤ人——が到来する巨大な移民社会アメリカが抱える課題に対して、セツルメントは「外国人大衆の可能な限り早い教育とアメリカ化」に作用する場であっ

51 Marianne, “Amerika,” 188.
52 Marianne, Brief vom 19. Nov., 401.

たことがうかがえるのである[53]。

Ⅲ　マリアンネはアメリカから何を学んだのか

1．セツルメントへの関心

i．慈善的諸力と社会化

以上、ヴェーバー夫妻の旅程に沿ってマリアンネの女性問題への関心を中心に素描してきた。それでは彼女はアメリカ社会で見聞したものをどう評価したのだろうか。

マリアンネはこの旅行を通してセツルメント運動に強い関心を示した。彼女はその担い手がとりわけ中産層出身の教育を受けた女性たちであったことを強調する。大都市の労働者地区に作られたセツルメント・ハウスには、こうした人々が常勤的な同居人となってハウスを経営し、さらに補助者が外部から支援に入る。マリアンネは、彼女たちが労働者の「経済状況の研究と改善、その精神的かつ道徳的改善」に関与することを「生涯の職業」としたことに、セツルメント運動の比類なき重要性をみていた。彼女たちの尽力なしには、アメリカの地方行政は立ち行かなかったはずであると述べ、そこに「博愛的な力の大いなる展開」をとらえている[54]。

セツルメント運動は、家庭性（ドメスティシティ）の文化に根差すアメリカの「母性主義」の伝統が都市の貧困救済活動に結びついたものであった。ケリーの全国消費者連盟も担い手は中産層女性であり、消費者としての大衆の教育を目的とするものであった[55]。セツルメント運動は、中産層市民女性の知力を結集し社会化させた具体例であった。それはマリアンネがドイツ市民女性運動に見出したもの――市民女性たちの個人的･私的関心を公的事柄へと媒介する機能――と似ていた。BDFは「母性主義」に依拠しながら女性の活動範囲を社会福祉領域へと拡大したが、そこに属するマリアンネもまた、「道徳的性質としての母性」を推奨する形で女性の「職業」への道筋を考察していたのである[56]。

同時に、セツルメントは労働者たちと恒常的に接する場であることから、「慈善活動」であるだけでなく「社会政策的活動」であることも重要だった。ハルハウスは乳児託児所・児童託児所・看護師等を整備しているだけでなく、児童労働

---

53 Marianne, “Amerika,” 178.

54 Ibid.

55 山内、75-76 頁 ; 栗原、94 頁。

56 Marianne Weber, “Beruf und Ehe (1905),” in *Frauenfrage und Frauengedanken* (Tübingen: J.C.B.Mohr [Paul Siebeck], 1919), 25.

に関する調査の実施・立法機関への申請書作成・同業組合連合の会合や労働者集会への場所の提供などにも関わったことをマリアンネは重視している。こうした試みは、「資本主義的発展の精神的かつ経済的な損ないを軽減すること」でもあった[57]。セツルメントは中産層女性と労働者たちとの共同生活の中心かつ社交の場であり、また社会改革を目的に据えた資本主義に対する「対抗勢力」でもあったのである[58]。

ⅱ．中産層女性と女性労働者との接点

アメリカのセツルメントは労働者地区や貧困地区を拠点にさまざまな支援活動を行うことで、中産層女性と女性労働者たちが協働する場でもあった。マリアンネは旅行中、シカゴでは女性労働組合連盟の会合に参加し、ニューヨークでは女性労働者クラブを訪問している。彼女自身、女性の雇用職業・労働状況・賃金・労働組合への組織化の程度に強い関心を寄せていた。何よりも彼女はここで、中産層女性と女性労働者との交流や、さまざまな職種を越えた女性労働者たちの交流を目の当たりにし、そこにドイツの状況との大きな違いを見出したのである。

ドイツでは労働者女性運動と市民女性運動は組織的にもイデオロギー的にも共闘することは難しかった[59]。しかしマリアンネはアメリカ社会のなかに、ドイツとは異なって、女性間の階級的・社会的分断を所与のものとはしない在り方を観察している。セツルメント運動の担い手である中産層女性が、女性労働者の状況の改善や文化的引上げに関わることをマリアンネは高く評価し、その点にこの運動の積極的意義を見出していた。もちろん彼女はドイツではこうした越境的交流が困難であると再認識したであろうが、市民女性と女性労働者の協働というドイツとは別様の在り方が存在することを経験的に知っていた、点を、彼女の思想を見る上で押さえておく必要はあるだろう。

アメリカの女性労働者についてもマリアンネは手紙のなかで好意的に描いている。これは上流階級の女性たちに対する冷めた態度と対比すると一層際立っているようにみえる。彼女は旅行中上流階級の女性たちとも接触している。たとえばニューヨークで銀行家のリヒテンシュタイン家に二度食事に招かれているのだ

57 Marianne, “Amerika,” 178-179.

58 Scaff, 174.

59 ドイツの女性労働者は一九世紀末の社会主義者鎮圧法のもとで組織化を妨げられ、さらに労働組合や社会民主党（SPD）の傘下にあって、社会主義的解放理論に基づいた階級闘争を女性解放よりも優先した。またSPDの女性たちが奉公人令の廃止を要求したことに対して、市民女性運動は奉公人の労働組合組織化に反対するなど、階級間の利害の対立は根深かった。U・フレーフェルト『ドイツ女性の社会史』（晃洋書房、1990年）、125-36頁。

が、「とても親切ですが、実際のところはまったくおもしろみのない人々」と向かい合っており、「肉体に対してのみ利を得て、精神に対してではなかったのです」と記している。続いてその翌日セリグマン教授夫人開催の昼食会で出会った「四人のとても好感のもてる『労働者の』女性たち」が対比されており、彼女は個人的な交流のなかでは、上流階級の女性よりも中産層・労働者階級の女性との交流に有意義なものを感じ取っていた印象を受けるのである[60]。

2．アメリカ人女性の社会的・政治的地位への関心

i．平等と仲間関係

講演論文においてマリアンネが言及したテーマに、アメリカ人女性の社会での高い地位と平等性がある。その理由は第一に、植民地時代の女性の不足が女性に希少価値を与えたこと、第二に「人格の自由、自己決定権、すべての人間の平等への信仰」という「民主的諸理想」の存在である。「財産・教育・業績がますます分化するにもかかわらず」、「根本において誰もが平等のもとで対等であると感じており、それにしたがって仲間を扱う」ところに、アメリカの政治文化がある。この「一般的な仲間関係」のなかで「あらゆる階級間の交流という公平無私さ、静かな自信、あらゆる集団の振舞いの確かさ」が育つのだが、こうしたものは外国人には「一つの新しい世界の息吹」として感じられる[61]。そしてこの「仲間関係」はジェンダー関係の基準にもなる。

> わが国よりずっと早く、アメリカ人女性は男性の仲間として主張する義務に気づいており、同じようにアメリカ人男性は、その優越する肉体的な力でもってか弱い女性の伴侶を彼に従属させたり、人格的に奉仕させたりすることを自覚的にやめようとしてきました。それによって両性の関係は〔……〕社会的生活ととくに結婚において、まさにわが国とは逆に形成されてきたのです[62]。

マリアンネはドイツ女性運動のなかでとくに結婚や性的関係の専門家とされるが、彼女は理想的な結婚の在り方を「同志婚」として定式化している。この一つの具体例をアメリカにおける男女関係のなかに見出していたとも考えられるだろ

60 Marianne, Brief vom 11. Nov., 384-85. リヒテンシュタイン兄弟の妻たちがカップの娘たちであった。ロートは夫妻がニューヨークのドイツ系の福祉支援活動に関わっていたことを指摘するが、マリアンネがそうした情報に接しえたかは不明。Roth, “Europäisierung,” 20.

61 Marianne, “Amerika,” 170.

62 Ibid.

う。

ⅱ．女性参政権問題

女性参政権の問題について、マリアンネはユタ、ワイオミング、アイダホ、コロラドにおける女性の完全市民権に注で言及している程度であり、本論では議論を展開しなかった[63]。書簡でもとくに言及していない。接点があるのは上流階級の女性ファニー・ヴィラード（Helen Frances Garrison Villard 1844-1928）にマックスとともに会ったことである。マックスの両親の古い友人として会ったのだが、彼女はヘンリー・ヴィラードの妻であり、奴隷制廃止論者のウィリアム・ロイド・ガリソンの娘であった。まもなく「女性参政権と平和運動のもっとも有名な代表的女性の一人」として頭角を現す人物であるが[64]、彼女についてマリアンネは一言も言及していない。

モイラーは彼女がアメリカ・フェミニズムの代表者と会っていながらも、参政権運動を含むアメリカの「女性運動」には言及していないと指摘している。総じて彼女には、アメリカの女性の状況は――教育の可能性にしても運動の資金面でも政治的権利の面でも――ドイツと比べて「楽園的」に映った[65]。BDF が公式に女性参政権要請を掲げたのは 1917 年であり、それまではドイツの政治的社会的状況から慎重な姿勢を取っていた。ただ、アダムスやケリーのセツルメント運動や全国消費者連盟は、女性参政権の要請と無関係ではない。ケリーは全国消費者連盟の調査から児童労働禁止を訴え、女性労働者と子どもの福祉のためには女性参政権が必要だと唱えていた[66]。改革のための必要な手段として女性参政権に踏み込むという議論を、彼女たちを称賛したマリアンネがどの程度認識していたのか、その政治的立場や思考を検討するさいに考慮に入れる必要があるだろう。

おわりに

この旅行における大学関係・家系・父母の交友関係からくる人的交流は相当に充実したものであり、献身的に接待してくれた好意的な人々との出会いによって、マリアンネは「わたしたちのもっとも興味深い旅行」となったと述べている[67]。彼女は講演論文の最後でアメリカの印象を次のようにまとめている。アメリカ人男性が、自然をねじふせて前代未聞の素早さでもって経済的文化と政治制度を作り

63 Ibid.
64 Roth, “Europäisierung,” 17; Scaff, 174.
65 Meurer *Leben u.Werk,* 191.
66 栗原、95-96 頁、288 頁。
67 Marianne, Brief vom 11. Nov., 382.

上げたのに対し、アメリカ人女性は、共感能力と精神的・道徳的な文化的偉業によってアメリカ的生活を彩り豊かに保ち、「一つの国民が有するもっとも貴重な財」すなわち「道徳的理想主義を護る者」という「真に女性的な使命」を委ねられていたという[68]。ジェンダー役割分担的に解釈されてはいるものの、資本主義的市場経済を発展させ、平等に基づいた政治文化を築き上げる一方で、他方では資本主義がもたらす弊害に抵抗し、平等という政治原理を実現することに巨大な慈善的諸力を発揮するアメリカ社会の両極のダイナミズムを、マリアンネはこの旅行を通じて実感したといえるだろう。

だが多様な文化的背景をもつヨーロッパからやってくる移民たちは、アメリカ化によってその文化的・民族的背景を後景化させることにもなる[69]。その同化が解放的・理想的であるばかりではないことにもマリアンネは気づいていた。中国人女性の医学博士キン（Yamei Kin）の講演（11 月 12 日）を聞いた彼女は次のように反応した。

> わたしは、彼女が西欧諸国民を非難したとき同意せざるをえませんでした。というのも、西欧諸国民はおこがましくも地上のあらゆる諸民族をその資本主義的－産業的文化のもとへと追いやり、ちょうどある工場製品が他のものと同一であるのと同様に、あらゆる民族はまさにほかの者と似た者になるからです[70]。

キンの西洋文化批判以外にも、ドイツ系移民の苦難や白人による黒人蔑視発言などを彼女は書き留めた[71]。アメリカが差別・矛盾・混沌を内包する社会でもあったことを、彼女自身十分に認識していたとうかがい知れるのである。

以上、本稿は 1904 年後半から 1905 年前半にかけての資料に限定して、一人のドイツ人女性の目から見たアメリカの一風景を素描した。その後彼女がこの地を踏むことはなかったが、1954 年までの彼女の人生のなかでアメリカとの関わりは何度か訪れる。例えば、第一次世界大戦中の 1915 年に平和主義者アダムスが中

---

68 Marianne, “Amerika,” 188.

69 同時にそれは、ドイツ・東欧・南欧からの大量の移民がアメリカを「世俗化」と「ヨーロッパ化」へと導き、「真正の北部州人気質（Yankeetum）」を衰微させたというロートの見方も当てはまる。Roth, “Europäisierung,” 11.

70 Marianne, Brief vom 11. Nov., 385.

71 Marianne, Brief vom 27. Okt., 359. マリアンネはブリンマー・カレッジでの昼食会で黒人問題が話されたことを記している。「貧しい『黒んぼ（darkies）』に話が踏み入ると、アメリカ人たちは、もっとも社会的な考え方をもったアメリカ人ですら一様に機嫌が悪くなり、彼らのキリスト教的で民主的な理想をすべて忘れてしまうのです」。

心となって組織したハーグ平和会議に関連して、来欧した彼女にマリアンネは連絡をとらなかった。この件をロートは彼女の戦時ナショナリズムの現れと指摘している[72]。だが、1930年に彼女はアダムス七〇歳の誕生祝いに寄せて『フランクフルト新聞』に寄稿した。そこでは近代都市の現実に対する道徳的抵抗者アダムス、「精神の民主主義」の実践としてのハルハウスが描かれているという[73]。ワイマール民主主義が逆風に曝される時期、彼女は四半世紀前に出会ったアダムスを通して何を語ろうとしたのか。また女性運動の文脈からは離れるが、1948年以降彼女はハイデルベルクの自宅にてT・パーソンズを筆頭にアメリカ人たちの訪問を受けることにもなる[74]。1904年のアメリカ体験がその後の彼女の思想形成と活動に対してどのような影響を及ぼしたのかについては、今後の課題としたい。

＊本研究は科研費（研究課題番号：15K01933）による研究成果の一部である。

72 Roth, *Familiengeschichte* 594; G. Roth, Zur Geschlechterproblematik in der Weberschen Familiengeschichte, in Meurer, *Beiträge,* 26.

73 Scaff, 44-45. この文献は未入手である。

74 Marianne Weber, *Lebenserinnerungen* (Bremen: Johs. Strom Verlag, 1948), 484ff.

ABSTRACT

Marianne Weber in America:
Settlement and Socialization

Yoko Naito

From August to November 1904, Marianne Weber (1870-1954) journeyed with her husband Max Weber (1864-1920) from Germany to the United States, to deliver his lecture at the Congress of Arts and Science in St. Louis. Through this journey Marianne Weber, already a women's movement activist in Germany, learned a great deal about American women's social, economic and political status and became acquainted with many American feminists.

Marianne Weber had a particularly keen interest in the settlement movement. In Chicago, she visited the Hull-House and met Jane Addams (1860-1935), and during her stay in New York she visited the Henry Street Settlement and met Florence Kelly (1859-1932) and Lilian D. Wald (1867-1940) as well. Moreover she participated in meetings of the Women's Trade Union League in Chicago and one of working-girls clubs in New York. In these meetings she observed the great deference between German and American circumstances in terms of intercommunion between classes and between job categories. Her strong interest in the American settlement movement was based on her sympathy for middle-class women with reasonable educations organizing philanthropy to support working people including children and to improve their cruel working conditions. Marianne Weber found the site a cooperative relationship beyond classes. In addition she looked carefully at how settlement leaders made social policies and social institutions with the will to reform society. Settlement houses were not only the center of community life and arena for sociability between middle-class women and working class women, but also the counterweight to modern capitalism.

Secondly, she visited a coeducational high school in St. Louis and women's colleges like Bryn Mawr College and Wellesely College. She was interested

in the rationale for coeducation. She believed the coeducational institution would have a social impact on gender equality in study and in vocation. From this point of view, she considered the women's college lightly a 'draw-back' regardless of esteeming its idealism.

Furthermore, she was interested in the household work of the American housewife. Compared to Germany, she found domestic labor in the US harder, due to lack of hired servants. She also observed the life of immigrants and immigrant communities especially from Germany, the Americanization of immigrants in settlements and clubs, the political culture of equality and companionship, women's relatively higher position in society, the problem of capitalism, and the problem of race and ethnicity.

This article uses Marianne Weber's letters to her mother-in-law, Helene Weber, in which she expresses her thoughts about the status of women in American society. This article also examines her article "What America Offers Women: Impression of My Journey", which she delivered at the Heidelberger National Social Society in January 1905. This approach will help to understand how her experience in America impacted her subsequent feminist thought and activity.